



源氏物語中後書

三



源氏物語首書中後書三

目錄

玉鬘男

初音

胡蝶

螢

麻菱



算尺
 野分
 仰幸
 蘭
 栴檀
 梅枝
 藤蓑葉

源氏物語首書中後書三

玉鬘

一わきま〜ふと

一かゝり〜あ

拾遺為頼世中小わきま
まじりかゝり思入るまじり
おろし〜いなりふきり

潜也思ひゆき新之龍の

易潜龍勿用註
 龍徳而隠と云り

孝經云満而不溢

引弁かゝりこれこれ
いさし〜いさし〜いさし
 我名り〜い

一松〜あふ次
 一象名り〜い

一にをせまきしるは

一ひなの別ふ

一このえんた

一秩分れまきしと

後選 祝の外にまきしるて
かきくつりまきれははがき
人のむしあハふるりまき
秩育月志れぬりあしき
日とてお海は長しとて
川奇あひまやまの別ふ
おとらつてわまのちたさ
いよりきんとは
万葉ちる各ゆる秩のえんた
とせられしおらまき
まのまき神 子のあは
鏡おえ

親の孝養ト云也

一きくはは

一糸さ

一丈夫のまん

一しんはは

すははら
年三長斎經云若有りテ
善男子女等修年三之
斎戒 忽脱諸難等一
年星云 年ノ星ヲ祭事
監ハ大宰の大監也相當
六位也侍内監ナリ叙爵
志らる叙留して有と大
の監トハ云也
おきりしこいふら
好まのふまきしる

一 世々しきもの

一 うとくはり

一 きせき

一 へんげ

一 くらあひ

天子より庶人小至まで
装束調ちり人との便殿
いふこと
ひそとハ女事之から帝の
こころをさうし

頭證 又見證わらハ

ちり子

思ふ井し思ふぬとも
女の心まこといしう
石をばし

市井商人との泊れを
川舟白波とあつり
ぬぬ日あつり
市井のいづれり

物温也 恨みゆし

妻戸ちまへ 掻放之

引寄りたるは
あんな三年あつり
ぬぬ

くは種之はまのり
つらきと種とせん
昔あつり
より殿と
昔あつり
あつり
こころ

一 のろい

一 くらあひ

一 わらわ

一 くらあひ

一 うらま

一 細長

- 一わらわ花田のういぬ
- 一うらりれく
- 一柳のとり物
- 一梅枝がり枝
- 一まきかひ
- 一こころのうきこみ

海賊の大波にんたの貝や
 ういぬのういぬ
 山吹の表枝葉葉葉葉
 ちりちりちりちりちり
 うらりれく
 柳の表の表まきまき
 梅枝のういぬ
 白のういぬのういぬ
 うらりれく
 まきかひのういぬ
 古風歌讀又古體

- 一さくらさくら
- 一人のゆき
- 一まきかひ
- 一紙人
- 一扇のういぬ

古風のういぬのういぬ
 うらりれく
 うらりれく
 一人のゆき
 事のういぬのういぬ
 下の紙紙人と子文字
 古風のういぬのういぬ
 うらりれく
 うらりれく
 一人のゆき
 扇のういぬのういぬ
 扇のういぬのういぬ
 扇のういぬのういぬ

さくらさくらしるし
おとせ

初音

一年きり

一粒のめ

いづれ

川音おとせのひま
わしつらきまきわ
拾遺抄これハ若菜つ
まりむしとて垣内の子
古今を流るる木の
ちりま

一まてい

一まき佛の

一まきしめ

朗詠早春詩云庭増ニ
氣色晴汝緑くま
玄細ハ上の枚々
法華經云梅檀香風可
悦無心云生佛国ハ極樂
浄土云也
齒固ハ元三の白
齒ハ
大根禱と
火さりの

一 少年の

一 少年の

一 少年の

是より其玉の鏡山の
奇と依りて久頼
西の世よりわかれ
後集よりいづれか
うらうら
川舟をたそわを君と
いふはさるるの
ちりんとたのハ
壽詞 日本記言吹口
壽文選
川舟わづこも鏡の心
ふれたさばくも見
ゆり君より千年ハ

一 少年の

一 少年の

一 少年の

氷池が破鏡 雪歌似残花
曾達真 柳似舞腰池如鏡
後撰春の日記より
いづれは柳のまゆより
元日子日也
朗詠子日云 倚松根摩腰
千年之翠満年 菅家
拾遺 ちりこい母の娘
梅のひさなるも
ひくころきれ 藤惟賢

一 ちまのふゆふね
 一 せけこころし
 一 年月いと奇
 一 音せぬ里
 一 物ねたしむ

ちまのふゆふねはちまのふゆふねの
 音せぬ里は美代やん
 十節記云正月子日登岳逢聖聖
 得陰陽静氣除其憂惱之所也
 四軸院子日中筆檜破子岳前
 躬恒集春の夕月も音の
 初声と音せぬ里はちまの
 まりいふと音せぬ
 伊行尺も音せぬと物ねたしむ
 せよ音の音せぬ里はちま
 ういふと音せぬ
 あらるるる人の始て文
 ちまのふゆふねと音せぬ

一 あややうに
 一 ちひらく
 一 さはらうに
 一 物よりよきに
 一 ころのさきまふた

貴字也るやうの
 日本記云伊特諾投黒髪
 成蒲萄は故に音せぬ
 ちひらくは音せぬ
 ありくは音せぬ
 万物よきもの
 唐東京錦也唐は
 東西両京有之其内東
 京の錦も音せぬ
 天皇御宇唐東京錦摸

用吾朝ニ今案白地錦ヲ
東京錦ト云也

一火ときたに

一えひく

一うれいす

一けきんきんさふ

一ちのまきやう

薰物ノ火そりの事云々
衣被香とうきりハ衣裳を
白ハきんきん
されてしうめくさきいす
ヤウキんきんせぬ
川ノ梅もさけり号つ小
家ハわきハきんきん
わきり号の
好物 良文集を者ハ
けしんきんきん
きんきんきんきん

一己んきん

一花の香きん

一あきハきん

一ちちきん

一世のきん

一たのきん

臨時客ハ正月二日三日間
実白大臣亭ノ客ハ
と云
古今花の香と風の使ハ
たうてきんきん梅と
くきんきん
於蓮華中経大天劫觀經
古今世のきん
きんハハ思人
きんきん
同集からたう
年はりり

一 夕のり

一 夕のり

一 夕のり

一 夕のり

一 夕のり

一 青少

夕のり

夕のり

夕のり

夕のり

夕のり

夕のり

夕のり

一 松浦

一 男踏歌

一 夕のり

一 夕のり

一 袖口

後撰 音こきう松浦傳
夕のり

正月十四日男踏歌十六日の
節會う女踏歌十六舞姫
夕のり

踏歌人以綿造花毛冠額
也号高中子十云々

声ハ繪ヤと夕のり
畫花ヲ不畫音
畫鳥ヲ不畫声

簾之一間く小あ方袖と

一春のやう

一とく

一とく

一とく

一とく

出せりのと

川舟にえりては柳梅と
さきさきとけりて
踏哥立御前奏壽詞

風流也

人の實あらうと
さきさきとけりて
西宮抄云踏哥日舞人起
座唱万春樂

一正琴ととのうら

管絃器皆袋納本儀之
琵琶袋 面錦或赤色海
箏袋 錦二幅 和琴下袋
如箏笙笛袋 大座同様也
笛云時ハ笙箏箏と笛
中ニあり之和琴琵琶ホノ
引物ハ皆中ニあり之琴ト
ハハ十三絃ニあり之和琴
袋ハ唐錦ヲ不可用和國
より出せたる器なり

胡蝶

一外の星ふハ

一つらぬいづる舟

一龍頭鷓首

春の光とあはるる前髪は
外はうらつて之三月昔比は
世とのちも教早と云流
今さうりちをまハ外の星と
ま〜ぬぬ〜と云
龍頭鷓首事と又摸唐
船と
前と云流ハ氷と云まする
お之鷓首風と云はてう〜ぬ

一柳枝

一廊とあつる

一をしの波はあふ

柳無氣力枝先動池有波
文氷盡用
繞廊紫藤架夾砌紅
藥棟攀枝描櫻桃帶
花移牡丹
柳無氣力詩首尾之
後撰水のあつる吹く
ま風や池の氷とまき
伊勢らのあつる
春風や山のまき
とひん

一 どのえと

一 せぬあハ

一 女は上のあ

一 われいさ

一 春のあつ

一 ろりいさ

一 中のあひ

一 ころいさ

一 ちあひいさ

一 さいさ

一 ちあひいさ

一 同いさ

後撰百あはどのえと
山あきやあか〜人あきあき
とせあ

古今波のあき〜あきあ
ちりあき水のあき〜あき
あき〜あき

蓬来山負敷亀背也 不覓

蓬来不敢帰 童男非女舟

中老 白氏文集

安名尊 催馬赤呂

古今波のあき〜あきあ
あき〜あきあきあきあ
あき〜あきあきあきあ

及昔ハ呂より律からるる
云之

いさ〜あきあきあきあ
有之〜あきあきあきあ
あき〜あきあきあきあ

空酔と〜あきあきあ

あき〜あきあきあきあ

あき〜あきあきあきあ

駱ウ字〜あきあきあ

酒と辞〜あきあきあ

拾遺あきあきあきあ

一中宮の御さす

一日使のよそひ

一鳥蝶小

一鳥蝶小

入小きりたるくさくの
名もきりけん

本朝月令二月十二日云く国史云
天平十七年九月平城中宮
請僧六百人令讀大般若
若經是盜觴也

束帛也直衣の宿衣也
射て束帛八日の也よそひ
著座の事
法會儀蝶鳥供花定事也

蝶鳥舞童の立出也

樂屋事也平張

胡床と日記おろく
ありも屋の夜さふ
人ふ番と引てまらふ
唐小天子の御さす
鳥の越調樂也鳥の楽
感し花小形くさると
池の水もささけはる
思ひつらるる

一鳥蝶小

一鳥蝶小

一鳥蝶小

一鳥蝶小

一鳥蝶小

一 ちりぢりぢり
一 きららけのうら

一 せの竹小

一 ちのぬいぬい

一 ちのひたひた

一 ちのちのちのち

原也

川崎の月夜を橋の
香とけけむしの人を
袖のうらむらむら

風生竹夜窓間月照
松時臺上行 良文集

女のうらむらむら
ぬいぬいひくひく
後撰のうらむらむら
友のむらむらむら
ちのちのちのち
感字 又愛心

一 ちのちのちのち

一 大田の松乃

伊勢物語のうらむらむら
けのちのちのちのち
むらむらむらむら
六帖のうらむらむら
大田の松乃
むらむらむらむら
むらむら

虫

一 虫のうらむらむら

一 虫のうらむらむら

積骨のうらむらむら

川崎のうらむらむら
月日はあつむらむら

ちりふきりふ 信明集
秋代より入むとくふちり
さきまきのまのふふ念
んころしとくね

一えうめうまのめ

一あのと

一うく声ととら

一丁急ハせてあ

儿帳の惟復かともあ

如案

ちう声ととらぬ出ハ
人ハおのちのこ言ホつ
せハ心の中とらうとらあ
ちうい之声ハせぬ出ハ
丁とまうりゆえ

一ちうとてん次か

一我んつ

一人の口ゆり

一いまこころえ

一はあしあ

四五月、交雲外語三三更ノ
後雨中、聲古今日月象
也思ハとまハ子親よふ
うさつていつちあくら舞
古今象あつとらとあ
申とらまきハ人あ
さくらとらあ

男女のあつハ大事を起

まうとらハと何

巖 又光 はあの外ハ
あつとら

一常の色しと

一なるりくとも

一ぬあしわと

一くもま

一まきこの色帳

あやめハハつとわきまを
又日ハ内と浮てあつとく
えらりくとも

其形ノ奥有りと後ハ
うしきハさうとさうさうの
續古今水くまて
あつとく月のおつとく草
うらりたやうと人ハさう
續金縷 雲絲 秋素
未濃とハ帳の帷上ハ白
さうと紫或緋深く之
今之世ヤと車下ハ藤ハ此

一さうぬく糸

一わぶちのききと

一めさうらと

一ききくとも

一大君きくとも

一との駒と

菖蒲重ハ表青月裏濃
紅梅也

標ハ表薄色裏青月也

身とさうと 勝負志と

是ハ競馬ノ事と云

五月ハ武徳殿ノ騎射と云

赤糸ノ事有リ唐人ハ装束で
馬のりて赤糸と云

孫王也

後拾遺云ハさうと川人
あやめとあやめと駒のさ
あやりきる 意度

一 ありきりしきり

一 ありきりしきり

一 さくらんどのみ

一 ありきりしきり

今案高蒲ハ駒ノ食世思
まよちをきハはちちあめと云
あさこのハ不愛之
能宣ワリまききりあひ
けらあやあまをさくらも
まらちをあらむ
拾遺 官はくろをせはたき
乃てそのまきりしきり
うほめとてえしきり
伊行尺 時鳥あらうらまき
くら子あまをまきりしきり
ふりぬれは
ありきりしきり
人のまきりしきり書
かしたまはまらあま
かりあま

一 日本記

一 吾人のよき

一 後のあやと

一 人たえりしきり

日本記三卷舎人親王
撰 神代の世あまの
まきりしきり日本記の
まきりしきり 寓言 寓言者
以己之言借他人之名以
言也ト注せり
源氏を教ハ万教訓之
好色遊宴事ハりりか
心得てんまハ力よ持失之
能可覚知事ト
唐朝書籍ヲ云々あり
人の作まきりしきり書也

- 一 志きこらぬ
- 一 ぬきこらぬハ
- 一 見えり心
- 一 ねやの志き
- 一 きて
- 一 見りさ
- 一 たり

愚癡なる也
ヨミミカハス
 不孝 日本記
 伊勢物語 志きこらぬハ
 隱蜜取とらり
 立身行道揚名後世以テ
 顕父母ヲ存之終也存経
 座右銘 無使名過實
崔子玉
 見著也
 倒せおきこらぬ

一 きて女子

茶室の志きこらぬ

度夏

- 一 川
- 一 志きこらぬ

西川、桂川、東川、賀茂川の
 此西河、鮎供也
 枕草子云、いづれあつては
 申小のりつていそせんこ
 扇の風とぬる氷あり
 志きこらぬとて
 めと 氷の志きこらぬ

一 正いん

一 水の上むらり

一 女のひもと

一 ぬきこひ

一 ききんちり

ら不_レ交_レさ_レり_レま_レり
終_レて_レ正_レいん_レて_レま_レせ
あ_レる_レあり_レ水_レ飯_レ今_レの
世_レく_レあ_レる_レ名_レ分_レて_レま_レあ_レん
六_レ条_レ院_レ深_レく_レ前_レを_レふ
あ_レる_レい_レま_レの_レ外_レあり
あ_レる_レさ_レて_レあ_レる_レい_レん
殿_レ因_レ生_レ微_レ涼_レの_レい_レん
帯_レ紐_レの_レあ_レる_レい_レん
觸_レ也_レ縁_レたる_レい_レん
家_レ摸_レ家_レの_レ子_レま_レる_レい_レん

一 けいふえんまき

一 ちんやまの

一 ねん

一 ちん

雁_レの_レあ_レる_レい_レん_レ列_レを_レた_レる_レい_レん
ら_レる_レい_レん_レ是_レを_レ雁_レの_レい_レん
れ_レと_レい_レん_レ好_レ集_レ家_レより_レも
あ_レる_レい_レん_レま_レる_レい_レん_レ店_レの
あ_レる_レい_レん_レ我_レの_レい_レん_レも
落_レ胤_レ腹_レを_レい_レん
川_レの_レあ_レる_レい_レん_レあ_レる_レい_レん
れ_レと_レい_レん_レは_レい_レん_レま_レる_レい_レん
直_レ人_レと_レい_レん_レ定_レの_レい_レん_レあ_レる_レい_レん
親_レの_レあ_レる_レい_レん_レ乃_レも_レい_レん_レま_レる_レい_レん
養_レ在_レ深_レ忘_レ人_レ未_レ識

一 くらつ〜

一 へつ〜

一 つ〜

一 ね〜

一 う〜

一 し〜

碎 白氏文集

あきききと〜

松子ハ〜

牛麩子葉マキ作シラ金銭ヤチ

良氏文集 架せ籬

頑字也は頑愚り

万葉 岩代の神ハたら

結松ハしき首ハ

鬱陶ハ結也

箏ハ三弦也 絃數多ハ

和琴の事

女ハのハはハ

圖書寮 和琴伊弉諾

伊弉冉尊御代令作出ハ

仍諸樂器ハ取上ハ重ハ

一切ハ能ハ人ハのハ

唐書ハ相ハ支ハ憐ハ

らハ相ハ支ハ憐ハ

目ハのハ力ハとハ

よハらハてハ女ハのハ

一 祿をいふに

一 かく見え

一 せしむ

一 志しん

一 申ふたのひ

祿言古今祿をいふに

あまきききんやうりてん

こそはるまのいりこ

ひきりあ

引き白く梅をいふと

梅の死をいふと

おしとわたりてきしき

小賽百葉二三のせしむ

わらひてふにいふちのき

ちくろいふ

舌利
川方さき石の中をいひあり
うらうらあまのこくは

一 せしむ

一 けしむ

一 せしむ

一 せしむ

一 水と見え

泥と近ういふ

過去善悪の目よりて

今生の容白は好醜あり

若得為人龍華盲瘡

諍斯経故獲罪如是

法華経

あまきききんやうりてん

あまきききんやうりてん

あまきききんやうりてん

あまきききんやうりてん

あまきききんやうりてん

あまきききんやうりてん

一うらぐらぐ

一おそののつら吹き

一しらぬ

一とらうたうら

一かの

一うらえん

一うまうらうら

一うらひねん

一まうらうら

一ひのうら

揚子江石、窈窕、蓋晴

夕霧の正、人、也、親と

毎日見、文王、日三度

首、文王、不踏道、文王、

道と、不、不、不、不、

日、父、と、可、向、又、大、風

疾、雨、雷、鳴、地、震、水、火、之

変、非、常、之、時、早、訪、親、以

参、朝、殿、瓦、日本、記、史、記、云、風

一起、磔、磔、揚、氏、漢、語、抄、云、白、雨、和、名

暴、雨、急、雨、琵琶、引、依、粮

本の枝うらうら、空のゆらうら

會明

高欄

予のそこのありふたわらわ
たぬ、神、分、は、次、は、朝、の
うら、と、い、う、う

真、實、と、切、ら、う、ら

虫、籠、菘、語、雕、籠、詩、や、も、は、ら、ま、り

一 黄の糸

一 青の糸

一 紫の糸

一 赤の糸

一 白の糸

一 黒の糸

女郎花の面より青ぬる

黄の糸色にうらな萌黄也

川字人の親のうらな小

あし神もいとたふたふ

まきひぬるや

けさやうらな

兼名苑云酸漿一名

洛神珠和名保都波

赤酸醬 日本記

ホウフキ

固宣師古言理自然也漢書

日本記小同袍腹同く

書てらうらな

一 ころのきとんき

一 あきこ

一 せこ

花文綾は有花文綾之

朝寒

無復風塵 日本記

柳 柳

一 世音の流

いさふらうらな

せうらうらな

あし神の流

いさふらうらな

一 どの年姓志をきく

一 うきうきの

一 高御ついで

一 うきうきの

一 うらなうき

一 わのひすう

一 ののうき

一 うきうきの

一 うきうきの

一 うきうきの

からる巻の概

野行幸ハ仁徳天皇御宇

行幸道橋之持渡官人

之檢非違使古實御前

所門ノ御款之ゆき

延喜帝野行幸有御事

事也

源氏勅答也

とてわのひすう

こころれ子世のけん

川言サキ

ききくに家家の固

引方天の系あつ存あり
わのひすう色の注さ
のうらなうき 菅家

除き

山威光也

此巻うきうきの何三本あり
いけもさうあつ有り
うけらハ
云う所統うき
ちうらなうき
うけらハ

一 ちりしり

一 ちりしり

一 ちりしり

一 ちりしり

一 ちりしりのまぶ

一 ぬりしり

ちりしり

ちりしり

ちりしり

ちりしり

ちりしり

ちりしり

ちりしり

ちりしり

不意

一 ちりしりのまぶ

一 ちりしりのまぶ

一 ちりしり

一 ちりしり

一 ちりしり

一 ちりしり

一 ちりしり

古老典侍也

文學の達したるを

歩躰也

是也不足なり

考事 勅當之

比翼 臣者君之羽翼也

日本記
安永のよきまはら
ちりしり

一 くらげ

一 かつお

一 ちりめん

一 ありふ

一 ひんのお

年々おぼえの解念

礼とのお

睦言

川方出てみるかゆれ別の
えうえうわらふまら
きふかからし
彼岸齋法道經云一切
衆生依持二八月齋十方世
界一切衆生離苦得樂靈
瑞而已乃至彼岸者二月
八月八王華會時終到彼岸

一 ちまき

一 ちまき

一 ちまき

一 ちまき

齋食法^上

癡也。飯のよらるる

いふ君とていふかしの
まうまあまのいふた

らぬ日か

くまき

ゆいこらけまうまの秀
白之方御のよまか
いづらわりの縁の何と
わらわりのいふたの
いふたの望回

一 くのゆき物
 一 可いせと
 一 くのゆき物
 一 くのゆき物
 一 くのゆき物
 一 くのゆき物
 一 くのゆき物
 一 くのゆき物

諸香方自唐土傳來仍
 如此云
 如形也
 慈愛也
 假名ハクニシリル能ハ
 入り入り入り入り
 哂一嘲哂也
 衆口鑠金 文選
 防民之口 甚於防氷 諺
 恐畏也 わるゝとらゝとらゝ

一 くのゆき物
 一 くのゆき物
 一 くのゆき物
 一 くのゆき物
 一 くのゆき物
 一 くのゆき物
 一 くのゆき物
 一 くのゆき物

異事ワラキヨロ
 史記曰 瞋目視項王
 須髮上指目 瞋目 項羽本記 樊噲力怒
 日本記云 天照太神踏堅
 庭而踏股若沫雪以就足散
 無人望
 いさうが
 ちろろろ

一今つゝおれ

一三ホキ〜いふ

一大きりのまほりの
〜ちぶら〜ちぶら

一い〜ま〜い〜れ

一あ〜い〜い〜や

川邊のまはるは今つゝおれ
ちぶら〜ちぶらとほ〜して
あ〜い〜い〜い

禮記婦人從人者也節則
從父兄嫁則從夫之死從
子從謂順其教令

宰籠也歟とハ宰とハ
多とハ多〜とハ多也

曲心也非正也

わの〜ま〜あ〜い〜い

後撰つ〜い〜い〜い〜い
えよ〜い〜い〜い〜い〜い
ち〜い〜い〜い〜い

案落 女事と云々

徒 日本記資便

月中有河之水之上有桂樹
高五百丈下有三人折樹
其名對父西河人人也
年十六得仙長生ナリ
兼名苑

一あ〜ん〜お〜あ〜つ

一よ〜い〜い〜い〜い

一ろ〜の〜お〜い〜い

模柱

一石山の佛

一とらとら

一きしんふ

一ちとらふ

一あつち

一三日の巻

石山寺在近江国瀬多南聖武
天皇御宇金就鳥仙人建立
多日本記幾多回

儀夫取無二

平泉記朽論語註場

淡舟あつち自詞也

嫁娶三日也餅まきの
儀式也

一廿八

一初ちけ

一きしん

一らた

一尾つせ河

和簾 ちやう

倭人の

賢く 聊

懐妊也

地獄の絵とそしめ
ろつち門マろつち
きり何ちそめ
はろつち達川の
多

一 うちこえち

一 今もやき

一 うちこゆ

一 じよきい

一 ー

一 ちよあひり

一 よとしゆけぬ

一 袖の氷

一 ちよあひり

一 ちよあひり

無過路無善道 善道中
種之後 無過路 義用
ちよあひり 今もやき
ちよあひり 今もやき
かとりん 今もやき

平旦也

堪痛

孝事 堪當也

念 風流ちよあひり

引方 今もやき
白雲のゆりあひり
よとしゆけぬ
同ちよあひり
その帯ハ袖の氷

沃懸也

後撰 今もやき
今もやき
今もやき
今もやき
今もやき
今もやき

一 ありまのきり

一 ありまのきり

一 ありまのきり

一 ありまのきり

一 ありまのきり

一 ありまのきり

一 ありまのきり

一 ありまのきり

一 ありまのきり

お水のこりきけあつて
かつらうきしう

和琴五拍子ホハすつて
三拍子ホハすつて

万葉立てたひのわさしと
いみしきとあつてあまきひ
いみしきと

六帖くららのあまきひと
物とあつてあまきひ
万葉

おのろ八世ホキチとあつて
おのろ八世ホキチとあつて
おのろ八世ホキチとあつて

凡集タタレハ世のあつて
おのろ八世ホキチとあつて
おのろ八世ホキチとあつて

鴨子西宮記獻鴨子事
多有之らのさきとあつて

詩云女子有行遠父母兄弟
ふつて

貞文日記云つてあつて
おのろ八世ホキチとあつて
張氏つて

無貞 後事也

一 たるるの舟

一 たきし舟

川流るる舟をいふ
たきし舟は舟
あまの舟舟
夏今よりいへたる舟
こころの舟人舟
こころの舟

梅枝

一 ちとあしこのふ

一 物のあらし

新渡の香具とと
物覆敷物首ちるの
箱のの渡唐也

一 かきしとハ

沉香事

一 二つとけ

二種宛調合

一 ゆあしとや

衣裳着のえ服也

一 ふうとらの音

鐵曰 香細搗者 和供入鐵
曰搗五百杵

茅山太平觀記

一 ふうとらの舟

不傳男子と云割あせハ也

一 つこの箱

此厨子のとと物と香臺
結構ノ祥也

一 中くくを
一 ちりほく

高光日記云云えのくは
まらほおとひてゆきは
少梅枝のちりゆりてゆき枝
はきりつりき
まらて散きんけり梅を
ゆきちりゆり枝のまきゆ

一 心葉
一 心葉

沉香瑠璃壺薰物入之
西宮抄菊花宴出膳具
心葉藤花用組云々心葉
松も梅も枝の中か金
ゆめえりゆりゆ

一 花の香はあ
一 紅梅く

此あらせ葉のわひしあまれ
ゆりゆり人の袖ゆり
紅梅の唐くゆりゆの細長
其の葉葉はゆりゆ
ゆりゆりゆり曲日記
深態阿間

一 花の枝ふあ
一 花の枝ふあ

川あ梅のむたらゆり
有ゆり人のゆりゆり
あまゆりゆり梅枝ゆり
ゆりゆりゆりゆりゆり
人ゆりゆり

- 一 足ふくげきこ
- 一 しくしく人か
- 一 あくこのり
- 一 此夕く色
- 一 誰かえんきん
- 一 のワニこい

醜こニクシ

外人不見く應笑 皇文集

あやうり物
 蓋のわきまきりふ匂ひまら
 物之仍而水色お埋て或は
 木下の赤お埋むいせり
 けりう君のまき新ふり
 せん梅のこれまとい香
 とも知人もまら
 彼不侍男と前お有り思方
 侍従の二程よりく

一 右をのちんせ

- 一 うしくわんせ
- 一 しく真ある
- 一 さしくふよまら

一 真ある

批判

承和出時右近陣、水溝の
 追地少うりまはさる
 うつむるものこと早まは
 梅は梅のち菊は菊の
 かな思方、ねの下うりむ
 俗さくしくわんせ
 ありうりまら
 梅は荷葉菊は花葉かき
 時くあひはく人ことわんせ
 流さくしく 斟酌あり

一 ちりんさ
 一 びんごの
 一 たりふあひさきし
 一 子世とのぬり
 一 ぎのあ

蕙物の批判くそく品た
 ちりんさ
 琴の終ノ息名を筆より
 つらき
 たりふあひさきと春
 りまハ双調
 川方ハいそいで神つふさの
 あつまんた〜ちりんさ
 の世つあつた
 川方花のよとあつた
 言の極々の行つた
 姉事〜と

一 ちりんさ
 一 びんごの
 一 たりふあひさきし
 一 子世とのぬり
 一 ぎのあ

ちりんさ
 蕙者時髪とあきさ
 え〜と
 世つあつた
 競糸
 思萌 思つた
 始つた
 無上際也

藤裏葉

一 ねく

一 菱ふさく

一 おあの下は

一 とんちんかち

一 正さく

雄く

川歌菱やうとさうさうはれ
友のむねも
きくうね拾遺

天下有職

史記云漢高祖業父太公
之家以家礼敬之高祖雖
父臣也下略

時宜よき也

一 友のうらみの

一 きく

一 ぐく

一 おあ

後撰春日斗友のうらみ
くくもきて君く思く
我くあのみん

天盃を結くくそは庭
くくして洋床もく
能宣集年とて消是は
くく人のあつてもく
去のまつてもく
くくくくくくくく
物只ひくくく春くわく
婦人日記 手弱甘人
多半夜来

一 せんみり

一 きやけり

一 りく

一 ねくちさる

一 ころふきり

誦流 巡流

常む 文選

拾遺 名はるるをいれぬもの
てそのまゝなり

えくし 船と云ふ
川よりえくしなるがたに
友よりまじりたる時

弘仁式くえくしり
菊田利 在奥列八雲折能目
河内ト云く
云松信より由く同くふ

一 りくしき

一 りくし

一 りくし

一 りくし

川よりえくしなるがたに
ゆめのと夢やとえくし
思ひけり

朝寝也

朝而万葉経くまの御食の
を秋芳くむりくし
るるの君くみり

寛平遺誡 大将藤原朝臣
者功臣之後 其年雖少
熟政理 先年於女事有
取失 先勅

一人ふぬきしり

一灌佛

一布施

一水りんやハ

一射の上えおき

被群也

推古天皇十四年是年初
每寺四月八日設齋會

灌佛の布施小首ハ錢を

用らる中はより錢小首
ぬる色と名身ゆり

ハ云りてくくあつこ
るくろりあきん水のり

ひりひり物ささり
くくくく國の弊と云

賀茂祭前日於岳跡有
神事号御取山阿礼者生也

見古語拾遺 下略

一近湯つるし使

一うさうてとと

一ゆりあき

一いりふ

賀茂祭春日祭使近衛
司用東遊被奉故也

臣射策為天下分一楯桂林一
崑山片玉今以課談及東ノ

事作来リ菅原大臣

冬この月此陸とあふ年家の
風くまゆりせてハ

川ささきくくくくく
ひりりあきワれぬあ相

向りまき
桃所 つかさてあき

一わきん年よちあふ

一ひよりこひ

一二葉よりあ

一せんさうと

執政人平賀場ののちい
まうち君昭宣公平賀貞観
七年九条の家少てせしき
きり内くしけり業平朝臣
橋むちりひのきをらの
こんとよるの道まふり小

奏慶也

後撰あふち名ゆら名の
菊るき花のわくしやく
世ちりくし名らち名ふき
整負絲千万白地草八九録
童稚畫成人園林半春木
白氏文集

一むらさき

一ちまき丁とあ

一ちまき

一ちまき

一ちまき

川名君うう一むらさき
むの音の志まの冊色
まのちりふまらゆ

真清水也能同分花云坊
水くうくくく流如とわ
云りまふ流如く云れ
小井くくくくくくくく
水くくくくくくくく
云くくくくくくくく
上久カキサヒテ 日本記
川名君くくくくくくく
くくくくくくくく

一せんくち

一紫のち

一時くちのきき

一くちのちきき

せんくち

如幕

度西雲壽星之田見

南中記曰唐紫雲之瑞生

堯也川言くちのちのち

少くちのちのちのち

あくちのちのち

古今秋をくちのち

ききもくちのちのち

文のちのち

堂よぐ樂也

一ぬんのち

一くちのち

圖書寮ノ事也旧記以

書司女官召樂具之由

くちのちのちのち

あくちのちのち

定多法師 和琴ノ名也

以槽作之

